
気の強い転校生

坂田火魯志

注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

【小説名】

気の強い転校生

【Nコード】

N1584D

【作者名】

坂田火魯志

【あらすじ】

いきなりやって来た転校生の女の子。綺麗でお金持ちの家の娘だがとんでもなく気が強い。そんな娘に何かと言われる竹村恭輔はどうなるか。気の強い女の子のお話です。

第一章

気の強い転校生

何気ない日常だった。それは誰もがそうで何時までも続くものだと思われていた。

ここにいる平凡な高校生竹村恭輔もそれは同じだった。ところがそうした何気ない日常というものは多分に砂上の楼閣でしかなく壊れる時は見事なまでにあっさりと壊れるものだ。この時もそうであった。

「おおい御前等」

朝のホームルームでだ。担任の乾先生が皆に声をかけていた。若くてやたらと無愛想な先生である。

「転校生を紹介するぞ」

「転校生ですか」

「昨日言ったぞ」

先生は朝からその無愛想さを思いきり発揮して生徒に伝えてきた。

「一人来るってな」

「そうだったっけ」

「初耳だよな」

「じゃあ初耳にしとけ」

先生はやはり無愛想であった。

「それでだ」

「はい」

「で、どんな転校生ですか？」

「とりあえず人間だ」

あまりにも酷い言葉であった。

「だから安心しろ」

「そりゃそうでしょ」

「なあ」

皆それを聞いて口々に言い合うのだった。

「いきなりリトルグレイが来たらなあ」

「矢追さんと一緒にな」

生徒達も乗ってそんな話をするのだった。かなり有り得ないことを平気で言い合う。

「宇宙人でもないぞ」

先生もまたとんでもないことを言う。

「そこも安心しろ、御前等」

「じゃあ誰ですか？」

「男ですか？女ですか？」

「女だ」

先生はそう答えた。

「女が好きな奴は喜べ」

「だってさ」

「じゃあ一応喜んでおくか」

男の生徒が口々に言う。しかし無愛想なことこの上ない乾先生の前なのでそうした言葉が異様なまでに浮き上がったものになってしまっていた。

「じゃあ今から呼ぶぞ」

先生は生徒達に告げる。

「いいな」

「はい、どうぞ」

「是非共」

先生にその転校生を呼ぶようにお願いした。何かここまで話を持つていくのに随分苦労した印象を受けながら。それでもそれは心の片隅に置いておき転校生を待つのだった。

「入れ」

「はい」

転校生はもうこの学校の制服を着ていた。黒のブレザーに赤いプリーツスカートだ。黒いハイソックスは自前のものだが白い靴と合

わさりかなり似合っている。

髪は黒く長いものでそれを後ろで束ねていた。目鼻立ちは整っていて釣り目気味だが二重で奇麗な目をしている。その目が妙に気が強そうだったが。

口は小さい。そしてきりっとしていている。それが目と合わせて彼女の顔と表情を形作っていた。奇麗だがかなり気の強そうな女の子であった。

「龍華美有よ」

転校生はそう名乗った。立っている姿勢も堂々たるものであった。

「どうぞ宜しく」

「京都の学校からこつちに転校してきた」

横にいる先生がそう説明する。

「へえ、京都の娘なんだ」

「そういえばそんな感じがしら」

皆先生の言葉を聞いて口々に言う。

「席はとりあえず一番後ろだ」

転校生の席の定番だった。

「それでいいな」

「はい」

その少女美有は先生の言葉に頷いた。その白い顔を微動だにさせずに。

「わかりました。それでは」

「じゃあこれでホームルームは終わりだ」

他にも何か言いそうなものであるがこの先生は違う。とにかく愛想というものが無いのだ。顔はわりかしどころではなくいい感じなのだ。それでも人気は今一つなのはそうした理由だからだ。これで結婚しているというのも皆かなり不思議がつている。

「じゃあな」

先生はすぐに教室を出た。それからすぐに別の先生が来て一限目の授業が行われた。それが終わってから皆で美有を囲んで話をする

のだった。

「京都からのね」

「ええ」

美有は女の子の一人の言葉に応えた。皆で自分の席に座っている彼女を囲んで話をしている。

「それでどうしてここに？」

「家の仕事の関係なの」

美有はそう彼女に答えた。

「こちらにも道場を置くことになったから」

「道場！？何の？」

「華道よ」

そう述べた。

「うちの家華道の家元なの。次男の家でこっちに移ったの」

「へえ、華道の」

「じゃあお嬢様なんだ」

「それは別に」

美有はそれは否定した。だが顔は変わらない。クールなままだ。

「そうなんだ」

「ええ。ところでね」

彼女はちらりと恭輔の方を見てきた。しかし皆はそれに気付かない。
い。

「よかったら。この学校のこと色々教えて」

「ええ、勿論よ」

「これからずっと一緒なんだしね」

「そうよね」

美有ははじめて笑った。笑顔もとても綺麗でそれはクラスの皆を魅了するのに充分であった。しかしちらりと見られた恭輔はそうではなかったのだ。

彼も見られたことに気付いていた。それを妙だとも感じていた。

「何なんだろう」

そう思ったがこの時はそれで終わりだった。美有は皆に案内されて学校の見学に出たのであった。それはその日のうちに終わったが彼は一緒に行かずに特に何とも思わなかったのだ。

次の日。ホームルーム前に彼はクラスメイト達と話をしていた。

「あの転校生だけれどな」

「龍華さんのこと？」

「他に誰がいるんだよ」

クラスメイトの一人松前昭文はそう彼に言葉を返した。

「いないだろ？」

「まあそうだけれど」

「だろ？その龍華さんだよ」

昭文はまた言う。

「いいと思わないか？美人で」

「つて御前彼女いるんじや」

恭輔は昭文に彼女がいることを知っていた。同じクラスの女の子だ。

「それはそれこれはこれだよ」

だが昭文はこう返すのだった。全然気にしていないのがわかる。

「だろ？」

「何かいい加減だなあ」

恭輔は彼の言葉を聞いてそう思った。実際にそれを言葉にも出したがあえて強くは言わなかった。

「お嬢様だしね」

もう一人のクラスメイト日上信が言った。

「それポイント高いよね」

「お嬢様だとそうなんだ」

しかし恭輔はそれを聞いても相変わらずの様子であった。

第二章

「俺は別にそうは思わないけれど」

「御前マジかよ」

「美人でお嬢様なのに」

「いや、それは関係ないんじゃないかな」

二人に言われてもそれは変わらなかった。

「だってさ、好みじゃない」

「好みかよ」

「俺はそういうのは気にしないんだよね。そりゃ美人は好きだけれど」

これは彼とて同じであった。美人が好きでない男は一種類しかない。同性愛者だけであるが生憎彼はそうではないのである。

「お嬢様でも」

「あの娘嫌いか？」

「だから美人だとは思っよ」

それはあらためて言う。

「けれどね。それでも」

「好みじゃないのかよ」

「変わってるね」

「いや、だからさ」

そういわれて少しムツとした感じになってまた言い返す。

「そうじゃなくて。あまりこう」

「気が向かないってわけだな」

「クラスメイトだとは思っけれどね」

そういうことであった。彼は本当にそれで留まっていた。それ以上もそれ以外も何も思うところはなかったのだ。この感情は変わらないだろうと彼も思っていた。

「まあ俺もアタックはできないしな」

「僕も」

昭文だけでなく信も言う。彼も彼女がいるのだ。

「御前はフリーだからいいと思うんだけどな」

「それでもさ。クラスメイトってだけしか思わないし」

「じゃあまあそうしな」

「うんうん」

二人は恭輔の素っ気無い様子に拍子抜けしながらもそう返した。話はこれで終わったのだがそれを聞いている人間がいた。教室の扉のところどころでこっそりと聞いていたのである。

「そう。それじゃあ」

その日とはそこまで聞くと一旦すつとその場を後にした。何かを考える顔をしながら。

その日の放課後。恭輔が帰ろうとすると不意に呼び止める人がいた。

「ちよつといいかしら」

「あれっ」

それは美有であった。その整っているが冷たく厳しい感じの顔で恭輔の机の前に来たのであった。立ち上がるうとしている姿勢の彼の前で傲然とした感じで立っていた。

「龍華さん？」

「学校を案内して欲しいのだけれど」

「あれっ、それって」

それを聞いて思った。

「確か昨日」

「昨日は昨日よ」

美有は反論を許さない口調でこう返してきた。

「今日もう一回見学したくて」

「もう一回？」

「そうよ。いいかしら」

「別にいいけれど」

恭輔は美有を見上げて答えた。

「じゃあ皆と一緒にね」

「それは必要ないわ」

皆に声をかけようとする恭輔を制止するのであった。

「皆には昨日してもらったし」

「じゃあ。止めておくんだね」

「そうよ。今日は貴方に御願いたいの」

また恭輔に言う。

「わかったわね」

「わかったよ。それじゃあ」

彼は何も思うことなく美有の言葉に頷いた。

「行く?じゃあ」

「ええ。御願いな」

こうして彼は美有のエスコートをすることになった。彼の後ろで表情を変えずに静かに歩くだけであった。恭輔はそんな彼女を何か人形のように思っていたがそれは口には出さなかった。見学はすぐに終わってしまったが最後の校門のところで行われたのだった。時間はもう夕刻になっていてかなり日が落ちようとしていた。

「有り難う」

美有はやはり無表情で恭輔に礼を述べた。

「おかげでこの学校のことがよくわかったわ」

「そうなの」

「そうよ。貴方のおかげよ」

また礼を述べた。

「このお礼はきつとするから」

「ああ、それは別にいいよ」

彼はそれは断った。

「別にね」

「そういうわけにはいかないわ」

しかし美有はそう言ってその拒否を許さなかった。言葉が強くな

っていた。

「お礼はしないといけないから」

「けれど」

「けれどもどうしたもないの」

やはりそれも許されなかった。言葉がさらに強くなっていた。

「わかったわね」

「う、うん」

「それでね」

大人しくなってしまった恭輔に対してまた告げる。

「明日の朝だけけれど」

「明日の！？」

「そう、明日」

都合がいいと言っべきか悪いと言っべきか。その日は休日だった。しかも恭輔にはこれといって予定もない。これでは断ることもできなかった。

第三章

「いいかしら」

「付き合えってことだよな」

「そうじゃないわ」

それは違うと言うのだった。

「御礼をしたいだけよ」

「御礼ねえ」

「それでいいのよね」

「うん、まあ」

断ることはとても許されない雰囲気だったので頷くしかなかった。

「じゃあそれで」

「わかったわ。じゃあ場所はね」

美有は場所まで指定してきた。

「ここじゃ何ね」

「他の場所？」

「そう。ええと」

何か必死に考えている感じであった。それが終わってからやっと述べてきた。

「駅前あつたじゃない」

「うん」

「そのの。噴水でどうかしら」

こう提案してきた。

「噴水のところ？」

「そう、あそこ」

また言う。

「あそこでいいわよね」

「僕は別に何処でもいいけれど」

場所は何処でもよかった。することは変わらないのがわかってい

だからだ。ただし一体何をするかまでは全くわかってはいなかった。予想もできなかった。

「じゃあそれでね」

「ええ。用意するものは何もなくていいから」

「あつ、そうなんだ」

「そうよ。それもわかったわね」

「わかったよ。じゃあそれで」

その話も決まった。ここでも結局は美有の言うがまま、進めるがままであった。恭輔は始終彼女の言いなりだった。反論も何も出来ないまま話は終わってしまった。

それから後で。彼は一人で帰りながらあれこれ考えていた。考えているといつても結論の出ない考えであった。そうしたことは結局のところよくあるが。

「何があるのかな」

それが不安で仕方ない。けれど幾ら考えても結論は出ない。出なくても考えてしまいがそれでもやはり何があるのかわからず仕舞いであった。そうこうしているうちに自分の家に着いた。それで家で夕食と風呂を終えてそれでも考えるが答えは出ないあげくに寝てしまい朝も答えが出ないまま遂に約束の場所にまで辿り着いたのであった。

「少し遅いんじゃないか？」

噴水のところにはもういた。当然制服ではなく赤いロングのワンピースの上に加え色の上着を羽織っている。秋らしいがその色でかなり目立っていた。

「待ったわよ」

「御免」

「言い訳は聞かないから」

やはり今日も有無を言わせぬ口調であった。見ればメイクもしていた。ナチュラルメイクとでも言うのか。薄いメイクなのでぱっと見ただけではわからない。しかしそのせいで学校よりもずっと目立

っていた。学校でのメイクとは変えていたせいである。

「行くわよ」

「わかったよ。それで何処に？」

「私が案内するわ」

それも彼女が決めていているようであった。

「それでいいわよね」

「うん、いいけれど」

「わかったわ。それじゃあ」

踵を返すように前を振り向いて恭輔に言ってきた。

「ついて来て」

「うん」

言われるままついて行く。といっても並んで歩いているが。そうして案内されたのはチヨコレート店であった。彼が入ったこともないかなり品のいい、しかも高級そうな店だった。

高級そうなのは店の中だけではない。品物もそうであった。彼が普段絶対に食べないようなチヨコレートが並んでいた。それを見て啞然とするばかりであった。

「何、ここ」

「何って見たらわからないの？」

美有は何でもないと口にした様子で彼に声をかけてきた。

「チヨコレートよ」

「いや、それは見たらわかるけれど」

流石にそれは恭輔もわかる。

「ただ。凄いね」

「そうかしら」

恭輔の驚いた顔とは全く正反対に涼しい顔を見せていた。

「別にそうは思わないけれど」

「はあ」

「好きなを選んで」

その涼しい顔で言ってきた。

「どれでもね」

「どれでもって」

「御礼だからいいの」

美有はその厳しいような、撃つような声で恭輔に告げた。

「いいって」

「断ることは許さないわ」

直に言ってきた。

「だから。どれでも好きなものを選んでいいから」

「はあ」

「さあ、選んで」

急かしてきた。

第四章

「お金のことは気にしなくてもいいし」

「えっ、けれど」

そういうわけにはいかなかった。何から何まで彼女に言われるがまま、為されるがままであるがそれでもいい加減困るものがあった。だがそれでも彼女は強かった。

「何なら私が選ぶけれど」

「龍華さんがって」

「もういいわ」

煮え切らない恭輔の態度に業を煮やしたように見えた。

「選んであげる。これね」

「えっ、これって」

彼女が選んだのは最も高いセットであった。恭輔はこれだけは選ぶまいと思っていた。だがそれを他ならぬ彼女自身が選んだのであった。

「すみません、これ下さい」

「あの、ちよつと」

「いいから貴方は黙ってて」

やはり何も言わせられなかった。

「選んであげてるんだから」

「はあ」

「これですね」

「そうです」

恭輔を強制的に黙らせてから店員さんと話をしていた。

「これを。包装はですね」

「はい」

こうして恭輔を完全に蚊帳の外に置いて話をする。気付けばそのチョコレートをその手に持たされていた。何が何なのかわからない

まま。

「これでいいわね」

「有り難う」

「だから御礼はいいの」

やはり有無を言わせない。

「私の御礼なんだから」

「けれど」

「まだ御礼が足りないみたいだし」

「えっ!？」

話がまた変なふうになっていた。

「今度はね」

「あの、今度つて」

「明日ね」

美有は恭輔にお構いなしに言ってきた。

「それでいいわね。待ち合わせ場所は今日と同じで」

「あっ、あのさ」

恭輔は美有のかなりの強引さに戸惑いながら言った。

「何をするの、つまり」

「だから御礼よ」

つっぱねるようにして彼に言ってきた。

「わかったわね」

「わかるも何も」

「断ったら許さないから。いいわね」

「う、うん」

頷くしかなかった。結局彼は明日も美有と一緒にいることになったのであった。彼は全く何も言えずに全てが決まってしまった。啞然とするばかりであった。

その日はチョコレートを買って終わりだったが駅まで一緒だった。美有は別れ際に恭輔に顔を向けて言ってきた。

「明日は一番いい服で来てね」

「一番いい服で？」

「そうよ」

そう彼に告げる。

「それもわかったわね」

「わかったよ。それじゃあ」

「明日は大事なことがあるし」

「大事なこと？」

また変な話になったのかと思った。だが美有はここでほんの一瞬だけしまった、といった感じの顔を見せてそれからすぐにそれを消した。それから何事もなかったかのようにして言うのであった。恭輔はすぐにさっきの顔は気のせいかと思った。

「何でもないわ」

「そう」

「とにかく。わかったわね」

そうしてまた恭輔に言ってきたのだった。

「明日は。一番いい服でね」

「うん。じゃあ」

「さもないと許さないから」

こつも付け加えてきた。

「それじゃあ。さようなら」

そこまで好き勝手な感じで言い伝えるとプイ、とした感じで踵を返した。そうしてそのまま彼女が先に姿を消したのであった。恭輔は彼女の姿を見送ってどうにもこつにも変なことになったと思った。だがそれでも言われた通りにするつもりであった。

「一番いい服かあ」

まずはそれであった。家に帰ってそれを選ぶのであった。

第五章

その次の日。彼は約束通り持っている中で一番いい服を着てきた。親から買ってもらったスーツである。スーツと言っても着ているのはズボンとベストにネクタイで上は着ていない。そのかわり上から黒い長いコートを羽織っていた。

「これでいいかな」

駅前の噴水のところで待ち合わせながら呟いた。見れば彼の他にもここで待っている者は多い。ここは格好の待ち合わせ場所なのである。

「約束通りにしたけれど」

彼にしてはそのつもりであった。あくまでそのつもりであるが。

だが厳しい感じのする美有には何を言われるかわからない。それが気懸かりであった。

「まあいいか」

「お待たせ」

そこで声がした。彼女の。

「龍華さん」

「あら」

彼を見ての声だった。振り向くと共にその声が聞こえたのだ。

「いい服じゃない」

「こんにちは………って」

挨拶が途中で途切れてしまった。

「そうかな」

「ええ、いい感じよ」

美有の声が笑っていた。納得してくれた声であった。

「そうでなくちゃね」

「うん………って」

恭輔はそこにいる美有の格好を見て思わず言葉を失った。そこに

いる彼女は赤い振袖姿だったのだ。着物の生地は絹でそれが鮮やかな光沢を放っている。帯も黄色で見事に映える。そうして桜や桃の花の模様が実に見事である。髪も奇麗にまとめていて何処のお嬢様かと本気で驚いたのだ。

「どうしたの、その格好」

「当然でしょ」

「当然!？」

「ええ、そうよ」

美有は平気な顔で述べてきた。

「これから御会いしなければいけないから」

「御会いするって」

「お父様とお母様に。二人でね」

「えっ!？」

恭輔はその言葉を聞いてまた声をあげた。

「あの。お父様とお母様って」

「うちの家のことは聞いてると思うけれど」

「う、うん」

彼女の家が華道の家元だということは聞いている。だがそれにしてもだ。あまりにも唐突なことには聞こえなかったのである。

「だったらわかるわよね」

「会っの、これから」

「そうよ。もう車は待たせてあるから」

「車って」

またぞろ話がおかしくなったと思った。

「何、それ」

「だから車よ」

美有はまた彼に告げた。

「車を待たせてあるの。爺やがね」

「爺や……」

話がどんどん大きくなってきているのがわかる。今度は爺やとき

た。彼女がお嬢様だということもほんとうであった。それもかなりの、である。

「さあ。行くわよ」

「車までだよ」

「何言ってるの、家までよ」

「こう言い返された。」

「さっきから言ってるじゃない」

「はあ」

「『親しい』お友達ができたって紹介しないといけないから」

「お友達なんだ」

それにしてもあまりにも物々しいものであるが。

「そうよ。いいわね」

恭輔の手を引っ張るようにして告げてきた。

「今から」

「うん、じゃあ」

そして結局それに引っ張られる恭輔であった。何もかも、最初から最後まで美有に引っ張られるがまま、されるがままであった。

車は黒いやたらと大きな車であった。あれが噂のキャデラックかと思った。

そのキャデラックの前に爺やがいた。そのまま執事の格好であった。

「お待ちしておりました、お嬢様」

「ええ、有り難う」

美有は恭輔に見せたこともない穏やかで澄んだ笑みでにこりと笑った。そうしてその爺やに優しい声をかけたのであった。

第六章

「今からね」

「畏まりました」

その爺やも爺やで畏まりましたと来た。

「それでは只今より」

「さあ、乗って」

美有は爺やが扉を開けると恭輔に顔を向けて言ってきた。

「殿方が先にね」

「殿方って」

「鈍いわね」

急にポツリと声を漏らした。

「じゃあ言っわよ」

「何を？」

「だからよ。この服はね」

恭輔の方をキッと見据えてきた。

「女の子がこうした服で前に出るのって。わからないのかしら」

「えっ……」

流石にここまで言われるとわかった。

「それじゃあまさか」

「そのまさかよ」

やっとわかったのね、と顔に書いてあった。そういうことであった。美有は今まであえて言わなかったのだ。そうすれば恭輔が全然わからなかったのだ。

「全く。何時わかるかって思っていたら」

「いや、そう言われても」

結局恭輔が鈍いだけであった。その鈍さも限度があるが。

「やっぱり」

「とにかく。行くわよ」

美有はまたしても強引に彼に言ってきた。

「一緒にね」

「龍華さんの家まで？」

「そうよ。行くわよ」

そしてまた問う。

「いいわね」

「うん」

実は異論はない。彼にしても美有は美人だと思う。それに自分を好いてくれる相手に好意を持たない人間もそうはいない。

「最初からそう言ってくれたらよかったのに」

「最初につて」

何を言っているのかと本気で思った。

「そんなこと言っただけじゃない」

「態度で言っただけだよ」

まだそんなことを言う美有であった。

「充分にね」

「わかったよ。言っただけだよ」

「そういうこと」

かなり強引だったがそれでも話が収まった。何はともあれ恭輔は美有の車に乗るのであった。二人は後部座席で隣同士になった。その席もかなり豪華なものであった。

「お父様とお母様が待っておられるから」

「何でそこまで話は？」

「当然じゃない」

これは美有にとって当然のことではしなく恭輔にとってはそうではなかったが。それでも当然のことにしてしまう美有であった。

「恋人ができたなら報告するのが義務でしょ」

「そうだったんだ」

「そうなの」

やはり強引に言う。

「わかったわね、私の愛しい方」

車が動く直前ににこりと笑った。それは今までの気の強い顔ではなく素直な少女の顔だった。その顔を見て恭輔は完全に陥落した。

「う、うん」

「宜しくね」

またにこりと笑う。その笑みがずっと側にいてくれるのなら少し強引でもいいかも知れないと思う恭輔であった。

気の強い転校生

完

2007・10・7

広告募集中

小説関連広告に最適です。
出版社や印刷会社はもちろん、
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくはPDF小説ネット広告募集をご覧ください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1584d/>

気の強い転校生

2009年3月24日09時22分発行